

文化を育てて半世紀 『大阪文化祭賞』への期待と課題



おいた ゆうこ
老田 裕子
(ソプラノ／奨励賞)



とよなか たきほだゆう
豊竹咲南大夫
(文楽大夫／奨励賞)



いわもと えり
岩本 恵理
(ピアノ／奨励賞)



のさわ いちろう
野澤喜一郎
(文楽三味線／奨励賞)



きくち まどか
菊池 まどか
(浪曲／奨励賞)



やまむら わか
山村 若
(邦舞／大阪文化祭賞)



はやし ゆたか
林 裕
(チェロ／大阪文化祭賞グランプリ)



大阪文化祭賞贈呈式にて
(前列:受賞者、後列:主催者および審査員代表・9月2日／大阪府公館)
※豊竹咲南大夫氏と野澤喜一郎氏は公演中のため欠席

今年度受賞者が決定

1963(昭和38)年に創設され、今年で第46回となる大阪文化祭賞(大阪府・大阪市・大阪21世紀協会主催)の贈呈式が、9月2日、大阪府公館で行われた。

今年は参加65公演のなかから、チェリストの林裕氏が大阪文化祭賞グランプリを受賞。「10年に1人の逸材。チェロという楽器の特徴を十分に把握した感動的な演奏」と、審査員たちの賞賛を集めた。その他、伝統芸能や洋楽分野から若手・中堅の6名が大阪文化祭賞や奨励賞を受賞。「受賞は私ひとりのものではなく、大阪で生まれ育った山村流に対する評価でもある(山村若氏／邦舞)」「これを励みに大阪の浪曲を全国に広めていきたい(菊池まどか氏／浪曲)」など、受賞者の多くが、大阪で生まれ、あるいは育った文化を広く発信できる喜びを語った。

文化興隆のトリガーとして

大阪文化祭賞は、大阪における芸術文化活動の奨励と普及を目的としたもの。5～6月の2か月間に大阪府内で行われた公演を対象に大阪文化祭を開催し、『伝統芸能・邦舞・邦楽』『現代演劇・大衆芸能』『洋舞・洋楽』の3部門で、優れた成果を上げた個人や団体に賞を贈呈している。第1回の受賞者はオペラ歌手の五十嵐喜芳氏。以後、坂本スミ子氏、桂小文枝氏、春野百合子氏、茂山千作(先代)氏、渡辺貞夫氏など、多彩な分野で日本を代表するアーティストたちが受賞してきた。

「誉めることはとても大事。受賞者には大きな励みになり、多くの人々には芸術に興味や関心をもつきっかけになる。そうして劇

場に足を運ぶ人が増えると演者もさらに努力して公演が盛り上がり、大阪全体の文化力を高揚させていく。大阪文化祭賞は、そうした好循環を生むトリガー(起爆剤)になる」と、大阪21世紀協会・堀井良殷理事長は期待する。

しかし近年は、参加公演数の減少や大阪文化祭賞に対する一般の認知度の低さなどから、そのトリガーとしての効力が存分に果たしきれない状況にある。

アピールする機会を増やす

大阪文化祭への参加公演数が減った一つの原因は、07年度から開催時期を秋(10～11月)から春に変えたことにもある。秋の文化庁芸術祭の時期と外すことで参加団体がホールを確保しやすくし、また、大阪文化祭の独自性を高めたいとの思いからである。しかし、近年は大衆芸能分野の参加公演の減少もあって、05年度に155件あった参加公演が07年は87件に減少。以来、「秋開催だと文化庁芸術祭の方に注目が集まり、春だと参加公演が減る痛し痒しの状況(堀井氏)」が続いている。

これについて堀井氏は、「受賞者の記念公演を開催するなど、アピールする機会を増やすことで大阪文化祭賞の存在感や重みを高め、人々の関心を高めることがきわめて重要」と強調する。

数々の優れたアーティストを輩出してきた大阪文化祭賞は今、開催時期の再検討や公演機会の提供、メディアを通じた知名度アップなど、新たな課題に直面している。

※写真は今年度の受賞者